良経筆名考 ― 詠出背景との関連性を焦点として

内野静香

はじめに

歌人が和歌を詠む際に、実名とは異なる名を用いることがあった。隠名・仮名などがそれで、本稿では、便宜上これらを総括して筆名としておく。ところで、佐々木孝浩氏の論にいわゆる良経歌壇及び後鳥羽院歌壇での筆名の流行が指摘されている[1]ように、良経は筆名使用流行の中核に位置していたと目される。

本稿では、良経の用いた筆名を検討することによってそこに込められた意識を明らかにし、ひいては和歌作品を分析する一助としたい。

一

それに先だって、前代からの沿革を踏まえた上で分類すると、筆名は三つに大別できる。

（一）一般的呼称でありながら、誰もがその使用者を特定できるもの、（二）官位または官職までを記す、いわば正格な署名に準えたもの、（三）自らの詠歌に対する意識を象徴的に表現するもの、である。

（一）には、例えば、歌合などで用いる隠名がある。代表的な隠名の「女房」は、新古今集を撰進せしめた後鳥羽院が「御製者不負云々（『袋草紙』下巻）」といった「特別性を避けるため」に使用し始め、「天皇・上皇・親王以外には」「摂関家の中でも、当主及びそれに準ずる人物」のみが用いた[2]。良経も『六百番歌合』で用いる。また、「金剛仏子【拾玉集・文集百首】」「天台末学桑門老比丘【同第四帖・法文短歌】[3]」等、結局は慈円その人を指し示すことが周知の事実となっているような例もここに含まれる。

（二）は、公任が用いた「和歌得業生柿本末成」の如き筆

名である。「和歌得業生柿本末成」は、穂久邇文庫本系統本・群書類従系統本『金玉和歌集』に記され、「みずからを歌道の正統の継承者と見る公任の自負がうかがわれる」[4]筆名としてよく知られている。これは、「和歌得業生―柿本末成」という〈立場―仮名〉の構成をとる。

良経の活躍した時代、これと同じ構成をとる例として、次のようなものが挙げられる。

後鳥羽院が『仙洞影供歌合【建仁二年（一二〇二）五月二十六日】』から『元久詩歌合【元久二年（一二〇五）六月十五日】』の間に用いた「左馬頭親定」[5]、またやや時代は下るが、前摂政左大臣道家（良経息）が用いた「春宮権大夫良実【貞永元年（一二三二）七月『光明峯寺摂政家歌合】』」等は、借名であり隠名でもある。[6]慈円の「桑門時貞【建久元年（一一九一）九月十三日花月百首】」「学生安成【同二年一月二十二日当座百首】」「従五位下源朝臣信定【同四年秋『六百番歌合】』」等もある。[7]

（三）の例としては、西行が自歌合である『御裳濯歌合【文治三年（一一八七）頃】』において用い、自らの志向性を象徴的に表現した[8]「山家客人」、「野径亭主」が挙げられる。西行は続く『宮河歌合【同五年頃】』でも「玉津嶋海人」、「三輪山老翁」という筆名を用いている。慈円の北山樵客百首【建久五年秋以降、良経の南海漁父百首と結番】と廿題百首【同六年八月十三日迄、良経の治承題百首に対応】における「北山樵客」、建久六年九～十月座禅の床での独詠（拾玉集五八七四～五八七七番歌）における「禅林朽木」等もここに含まれる。場所の名称と対世間的な在り方を記す〈在所―有様〉という構成が主である。

二

では、良経が用いた筆名についてみていこう。

良経の筆名では、「南海漁父」「西洞隠士」と「式部史生秋篠月清」がよく知られている。その他に、「志賀都遺民」「喜撰余流」「門下槐樹」がある。

それらを、詠歌時期の順を追ってみてゆくこととする。

（1）

良経が筆名を使用した早い例に、「志賀都遺民」がある。

拾玉集第五帖には、

殿の大納言殿彼十首歌本歌幷寂蓮和可御覧之由被示仍持参之令進了其後又和遺其詞云、遺懐四明幽趣奉和十首之

佳什　　志賀都遺民

と詞書される良経歌（五九九一～五九九九番歌）が載せられている。これは「文治五年九月寂蓮入道の許へ無動寺よりつ

かはすなり」として同帖に載録する、慈円の贈歌一〇首（五四三一～五四四〇番歌）とそれに対する寂蓮の返歌一〇首（五四四一～五四五〇番歌）に、良経が和したものである。[9]

この時期は、良経が歌壇的詠歌活動を開始する直前に当たる。[10]家庭環境では、兄良通の死（文治四年二月二十日）という悲しみを吹き払うかのように、妹任子の入内という慶事が現実化しつつある時期であった（入内は同六年一月十一日）。

そこに使用された筆名が、一（三）〈在所―有様〉という構成の「志賀都遺民」であった。

在所を示す「志賀都」は万葉集以来の歌枕であり、この時代には天智天皇の大津宮宮跡地として、懐旧の情をもって詠み込まれてきた歌枕である。[11]続く「遺民」は、前代からの生き残りの民や、往昔の風を今に伝える者との意である。この筆名を用字に即して読み取れば、天智天皇の代の風を今に伝える者の意になる。

「志賀都」は遠い時代を想起させ、それに対する懐旧の情を示す歌枕である以外に、良経にとって現実とのつながりも深い。志賀は比叡山の大津側からの登り口でもあって、四明[12]の幽趣に胸中の思いを晴らすと詞書していることから、この筆名を用いた背景には、比叡山無動寺にあった慈円への思いもあったものと考えられる。また、慈円（当時35歳）・寂蓮（同50歳前後）より若く、詠歌活動のスタート地点に立ったばかりの良経（同21歳）が彼らに対して伝えるべき内容は乏しい。とすると、遺風を伝える者という、自身が想定する望ましい姿を示したと考えられるのではないだろうか。歴史の長さを誇張的に表現することで、かように長い伝統に連なり、また後世に伝える役目を担わんとする気負いが表明されている。[13]

（2）

続いて「喜撰余流」をみる。

建久元年（一一九〇）十月十九日、兼実・実房（左大臣）・兼雅（右大臣）以下の公卿が参加した東大寺棟上が行われた。『玉葉』によれば、十九日の後白河院の東大寺棟上御幸に先駆けて、十五日に良経は兼実・慈円・定家らと共に宇治平等院に赴き、二十日に帰京している。その間に定家・慈円の贈答とそれに対する良経の追和という形で和歌が詠まれ、良経はそこに「喜撰余流」という筆名を使用した。[14]

「喜撰」は片山亨氏に指摘される如く、[15]喜撰を強く意識したものであることは、「わがいほは宮このたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり（古今集・雑九八三　喜撰）」からの影響を受ける良経第一首目「あたらよをわれもたゞには山しろの世をうぢ山のいにしへの跡（拾玉集五五二九）」の表現からも明かである。また「余流」は支流・分流の意であ

るが、ここには喜撰という古今集序に引かれるほどの歌人の流れを汲む者の意と言え、喜撰という対象に対する自身の志向性が組み合わされた筆名である。一（三）〈在所 ― 有様〉の変型となる。

ここに感じられる気負いには、この年、花月百首・二夜百首等と良経歌壇としての活動を活発化させていたことが背景としてあるのではないだろうか。但し、「志賀都遺民」に垣間見られた「家」意識の如き歴史観の反映は見られず、地名に即した即興性が勝ったものといえよう。

ここでは、父に従って宇治の地に赴き慈円・定家の和歌贈答を耳にした良経が、それに和することを思い立ったときの、詠出当時の意識が「喜撰余流」という筆名に反映されていることをおさえておきたい。

（3）

拾玉集第五帖の贈答歌群に収められた良経・慈円間の贈答歌に、「門下槐樹」という筆名も用いられている。「方今遙思四明之風景忽十首之露詞不顧客嘲竊寄禅居而已」の詞書のもと、

としへぬるわがたつそまの杉むらにいく秋風の君をとふらん（五八五八　良経、月清集・同一二四一）

かぜならで君がとふこそうれしけれわがたつそまの杉のしるしに（五八六八　慈円、月清集・同一二四六）

等の、慈円の様子を思い遣り、建久六年（一一九五）九月二十三日、比叡山無動寺に創設された勧学講[16]の隆盛を祈る良経と、答歌としての形式以上に良経を思い遣り、政治力の後押しを以て比叡山の衰退を防ごうとする自身の立場を示す慈円との贈答歌（五八五六～五八七三番歌）から成る。

「門下槐樹」は表面的には屋敷内の槐の樹の意であるが、「門下」からは大納言の唐名「門下侍中」、中納言の唐名「門下侍郎」といった官位の唐名が想起される。「槐樹」に関しても三公（太政大臣・左大臣・右大臣の総称）の意を持つことが見出せ、また官位の唐名を見ても公卿が「槐棘」であり、大臣が「槐門」であるから、仮託する立場だとしても政治と不可分な語義を含む。つまり、この筆名は前後半を通じて、政治状況と不即不離の詠作背景を強く印象づけるものなのである。

「門下」「槐樹」共に官職を表しており、一（二）〈立場 ― 仮名〉の変則的な例と言えよう。

ところで、勧学講創設が最晩秋の九月二十三日であるためか、「槐樹」が持つ三公の意のためか、片山氏は当該贈答歌の詠出時期を慈円の勧学講始行以降で、且つ良経の任内大臣（建久六年十一月十日）以降である建久七年秋を想定している[17]。当該贈答歌の一部は月清集に採られている（秋部一二三

九～一二四八番歌）のだが、「末／梢」を掛詞にした「梢の秋（五八五九番歌）」や「木のはふりしく（五八六一番歌）」などの表現から、晩秋の詠であることが分かる。九月二十三日から九月末までの最晩秋に交わされた贈答であるなら、建久六年秋で良いことになる。

実際の状況を見てみると、建久六年秋の段階で良経は権大納言として「門下（侍中）」を名乗り得る。また「槐樹」に関して、実際の任内大臣は同年冬となるのだが、良経の任内大臣が現実味を帯びたものであることは、『玉葉』同年九月四日条から知られる。同日条に記された兼実の潔斎は、皇女（任子腹）の御五十日・御百日の祝いと良経の任大臣を春日社に祈願するためものであった。兼実の継嗣たる意識が「槐樹」として示されたとすれば、任内大臣を待つまでもなく、勧学講始行の建久六年秋に、無動寺に在る慈円の許へ届けたとしてなんら不都合はない。

兼実・慈円そして観性（建久元年十一月入寂）によって続けられてきた仏法興隆・王法興隆の動きを追い襲う気概の一層の奮起が窺われる筆名であると言える。このように筆名に気負いが表れる点は、「志賀都遺民」「喜撰余流」と同傾向である。

当該贈答歌の半数が月清集に採られていて、「志賀都遺民」「喜撰余流」使用歌からの採入が各一首に留まるのと好対照である。「志賀都遺民」から六年、「喜撰余流」から五年の歳月が経っており、その間に良経は『六百番歌合』を成功させている。その成果に相応しい自認に依るものであろう。

三

本節では、その筆名を冠した呼称の百首歌として家集にも収めている「南海漁父」と「西洞隠士」について考えてみたい。「志賀都遺民」「喜撰余流」「門下槐樹」が望ましい在り方の提示によって自らの積極性を示そうとした筆名であったのに対して、「南海漁父」「西洞隠士」では漁父・隠士に身をやつしている。この差異に注目しつつ、それぞれをみていこう。

（1）

〈在所ー有様〉の構成をとる「南海漁父」は、「北山樵客（慈円）」と交わした南海漁父百首に用いた筆名[18]で、一（三）に分類される。

比叡山を指す北嶺が「北山」という筆名になり、それとの対比から「南海」が生まれたという過程が想定しやすい。さらに、漢詩文で「漁樵」と対置されてきた漁夫（父）と樵客であり[19]、南に対する北、海に対する山という対比と相俟って、両者の間でこのようなポーズ(pose)が興じられていたこ

とが分かる。

猶、身をやつした対象つまり〈有様〉の「漁父」は、拾玉集では目録・端作り・跋共に、各諸本「漁夫」となっているが、月清集では諸本を通じて「漁父」である。[20]『楚辞』「漁父辞」を典拠とする「漁父」は、自己の廉直を訴える不遇な者の含意を持った漁師の意となる。「漁父」に良経の意があるという仮定に立って「南海漁父」を直訳すると、南の海で漁する不遇な老人の意となる。

全くの謙辞であるが、「南海」は単なる南の海という意以上の背景を持つと思われるので、「南海」についてみていくこととする。

和歌に詠み込まれる「南海」の典拠には、竜女成仏と補陀落山が挙げられる。早くから釈教歌題とされてきた『法華経』提婆達多品の竜女成仏[21]であるが、良経周辺でも

玉ゆらに出ぬと見えし海の月のやがて南にさしのぼる哉

（拾玉集・法華文百首・提婆品「龍女成仏」二六九〇）

と詠まれており、また、「南の海」が仏の威光を表すことが、

見るもうれしみなみの海のいろくづのいつつの雲のはるるけしきを（同・第四帖・「皆見龍女」四七七一）

から窺い知れる。

次に、遙かインドの南海岸にあり観音が住むとされる補陀落山[22]を見てみる。日本では熊野が比定されており、北嶺との対比で南海に熊野が意識されていた可能性は充分に考えられる。『袋草紙』上巻には、

ふだらくのみなみのきしにいへゐしていまぞさかえん北の藤波

ある人の云はく、「これは南円堂の壇突くの時、翁出で来りて、この壇を突くとてこの歌を誦す。春日明神の変化」と云々

が、藤原氏の氏神である春日明神の歌として載せられている。[23]左注と併せて、藤原氏との深い関連が窺われる。

猶、「南海道」との有意な関係性は見出せない。

これらのことから、都から遠く隔たった清浄な地として「南海」が比定されていたと言えるのではないだろうか。

良経の当該百首は隠遁志向を窺わせる一方で、治世への或いは仏法興隆・王法興隆への意気込みが濃厚なものであった。[24]そこに用いた筆名は、仏教的な背景を持つ「南海」と「漁父辞」中の「漁父」とを取り合わせたものとまとめられる。後者からは隠遁志向が看取できるが、前者によって仏法興隆・王法興隆への意欲も看取される。政治的立場の自覚の一方、それとは相容れない隠遁志向が表されていると言えよう。

（2）

「西洞隠士」は「南海漁父」と同様、〈在所―有様〉から成る筆名で、一（三）にあたる。生来の隠遁志向を思い起こすと、自らの志向性を含ませたものとまとめてしまうこともできる。しかし、建久の政変による籠居中に詠まれたという西洞隠士百首の詠出状況[25]を考えると、そう単純には言えないようである。繰り返し不遇感を表白する百首中には、「うきよかなとばかりいひてすぐしけむむかしにゝたるゆくすゑもがな（六九一）」等、自嘲的な雰囲気も漂わせている。[26]このような百首に、俗世との交わりを絶つ「隠士」の名を用いたことからも、その意図は充分に察せられるものと思われるので、本稿では「西洞」の含意に焦点化して考えてゆく。

西洞隠士百首に対応する、慈円の四季雑各二十首都合百首の四季歌に多く詠み込まれた「秋」は、百首全体に憂愁を漂わせていた。[27]前後の百首歌と比較して、西洞隠士百首も「秋」の使用比率は高い。あるいは秋を西に配する五行説が反映されて、「秋」の多用から筆名に「西」を織り込む着想を得たのかも知れない。

さて、「西」には西方浄土の意が含まれることが多いので、その可能性を検討していく。

良経の信仰のあり方は「台・密・浄土の混合したもの」[28]で、欣求浄土を詠む良経歌には「西」に寄せる心が明示されている。西洞隠士百首中には、現世は前世の報いであると詠む「すぎゝけるよゝにやつみをかさねけむむくいかなしきのふけふかな（月清集・釈教部・十如是「報」一六〇〇）」[29]と同着想の「さきのよのむくひのほどのかなしきを見るにつけてもつみやそふらむ（六九四）」、仏法興隆による王法興隆を図る活動の停滞に対する憂愁を示す「ながきよのすゑおもふこそかなしけれのりのともし火きえがたのころ（六九八）」、迷妄の闇に迷う心という仏教語的な意味合いの「心の闇」[30]を詠み込み、無明長夜を照らし迷う心を救ってくれるはずの真如の月に雲がかかっていると詠む「やがてさは心のやみのはれねかしみそぢの月にくものかゝれる（六九九）」等の仏教的な歌がある。仏教的な歌であっても浄土信仰を明示したものはないので、良経に「西」＝西方浄土という意図があった訳ではないことが分かる。

「洞」字には山家の情趣をうたう用例もある。[31]しかし、当該百首で「かずならばはるをしらましみやまぎのふかくやたにゝむもれはてなむ（六九七）」と詠む良経の心が向かうところではあるまい。「仙洞」が上皇御所の意であるように、「洞」は仙人・隠者の住まいを想起させる語である。世をのがれ住む地としての用例は、典拠を特定し得ないほど非常に多い。

このように見てくると、「西洞隠士」は、西の方角にある隠遁の地に世を避けて暮らす者の意であり、一般的な語義を組み合わせた筆名と言える。これは構成を同じくする「南海漁父」ばかりでなく、「志賀都遺民」・「喜撰余流」・「門下槐樹」のどの筆名とも異なる点である。当該百首で良経が見せた気弱さは、慈円の共感を得られるものとは言い難かったようではあるが[32]、良経にしてみれば、慈円とのみ詠み交わした百首なので、失意の様を表現できれば事足りた。筆名が、直情的に心情を吐露する作品内容と同趣向にあると言えよう。

四

ここまでに検討を加えてきた筆名が、和歌作品群個々に冠せられたものであったのとは異質ながら、最後に、家集名に用いた「式部史生秋篠月清」についてみておこう。

「式部史生秋篠月清」の構成は〈立場―仮名〉となっている。一(二)に挙げる正格な署名に準えた体裁の筆名である。〈立場〉を重ねた「門下槐樹」はその変型であったが、〈仮名〉までを示した筆名を良経は他に採用していない。

さて、「式部史生」は官職であるが、九条家次男として生まれ継嗣となった良経が、式部省の下級書記官である「史生」たり得るべくもなく、仮構のものであることは一目瞭然である。官職を家集名とする例に『長秋詠藻』『拾遺愚草』等があるが、これらは実際の官職に依拠していた。ここには、一条摂政伊尹が「大蔵史生豊蔭【一条摂政御集[33]】」に我が身をやつしたことが想起される。あくまでもポーズとして、貴顕が敢えて低位低官の者に身をやつすという趣向である。その対象が官人である点は、「南海漁父」「西洞隠士」と明らかに異なる。

続く「秋篠」であるが、そこは春日社へ赴く際に通過する地であり、興福寺領でもあった。「秋篠」は、和歌では、「秋しのや外山のさとや時雨るらんいこまのたけに雲のかかれる(西行法師家集二二〇、新古今集・冬五八五)」の如く「生駒山―雲」と併せた遠景としての把握や、「あきしのはをりならずとやはるはただかすみのうちにたちかくるらん(教長集四三)」の如く「秋―春」など他の季節との響き合いによって、詠み込まれてきた。用例はそう多くなく、新鮮な響きを持っていたと推察される。

そして、「きよみがたはるかにおきのそらはれてなみより月のさえのぼるかな(月清集六〇)」等、月の清明な美しさを好んで詠んだ良経に「秋―月―清し」の連想が働き、「月清」と組み合わせたであろうことは容易に推察される。

おわりに

「志賀都遺民」「喜撰余流」は文治末年から建久初年、いわゆる初学期から新風期への端境期に、先達に誘われるようにして詠んだ作品に使用されていた。両筆名には、詠歌活動に対する意気込みが素直に示されていた。この意気込みは、当座性の強い作品内容であることを考え併せても、良経の詠歌史的観点から見て高質とは言い難い当該作品に比して、気負いとも言えるものであった。建久期の終盤に用いられた「門下槐樹」は、良経から慈円への働き掛けに際して使用されたものであったが、政治の中枢にある者としての自覚が流露したものであった。これら三者は、眼前の問題に対して積極的に対応していこうとする態度を素直に表したものとなっていた。私的性格のより強い、当座的な贈答という背景も手伝った率直さが垣間見られる筆名であった。

なお、「志賀都遺民」「喜撰余流」と「門下槐樹」との間に見られた違いは、贈答相手の違いに拠るものであろう。後者の使用時、良経は天皇家の外戚となるという問題に直面していた。その問題に関しては、叔父慈円が最も素直に心情を訴えやすかったと考えられるからである。

そのような慈円と詠み交わした百首に用いられた「南海漁父」「西洞隠士」は、権門の良経が卑賤の身に我が身をやつすというポーズをとった点では共通性が見出せるものであった。しかし、二重三重の含意を持たせた「南海漁父」と、一般的な語義に拠って詠出時点での心情を反映させた「西洞隠士」との間には、詠作に際しての精神的余裕の有無という大きな違いが見られた。

また、家集に冠した「式部史生秋篠月清」は、正格な署名に準えたものであったが、低位低官の者に我が身をやつし、みづからが好んだ対象に対する把握をも盛り込んでいた。

以上、良経は筆名であると即断できるような虚構性の高い筆名を採用しており、風趣の心を託す存在として和歌作品があったことを示していよう。しかし、現実から遊離して単に雅びをのみ追求した訳ではなかったことは、筆名が詠歌時期・詠歌状況・政治状況の違いに根差す違いを持つ傾向のあったことで明らかであろう。

〈注〉

引用は、月清集の歌本文は『天理図書館善本叢書　秋篠月清集』（八木書店・昭52）に拠り、拾玉集は歌本文・歌番号ともに多賀宗隼『校本拾玉集』（吉川弘文館・昭46）に拠り石川一『拾玉集本文整定稿』（勉誠出版・平11）を参照した。その他は特に注記しない限り歌本文・歌番号とも新編国歌大

観に拠った。

1　佐々木孝浩「後鳥羽院歌壇成立期における一問題―正治二年十月一日歌合の代作説をめぐって―」（国文学研究資料館紀要22・平8三月）、参照。

2　兼築信行「「女房」という出詠名（覚え書き）」（『礫』平8十月）、田渕句美子「御製と「女房」―歌合で貴人が「女房」と称すること―」（『日本文学』51・平14六月）、参照。

3　拾玉集には「短歌」とするが、元久二年（一二〇五）四月二日、後鳥羽院に奉じた長歌である。定家の返歌と併せて、拾遺愚草（二七三八～二七四一番歌）・『増鏡』（巻第一おどろのした）にも載る。

4　日本古典文学影印叢刊12『新撰朗詠集・金玉集・臨永和歌集』（貴重本刊行会・昭56三月）竹鼻績氏の解説、並びに和歌大辞典「金玉和歌集」の項（安田純正氏の執筆）、参照。

5　「佐馬頭親定」は後鳥羽院の隠名として知られているが、『建仁元年九月十三夜和歌所影供歌合』に関しては、田村柳壹氏によって、実在人物説が提出されている。「二人の佐馬頭親定―後鳥羽院が身を「やつす」ということ―」（有吉保編『和歌文学の伝統』角川書店・平9八月）

6　当時、道家息良実は春宮権大夫であった。

同じ歌合で、権中納言従二位教実（道家息）は「忠俊」の筆名（隠名）を用いている。道家のいとこに当たる忠俊（一条能保孫）から名を借りたものであろう。実在人物の忠俊は、嬉子（道家女）入内に際して立ち働いている（『明月記』寛喜元年（一二二九）十一月四日・同年十二月四日条ほか）。

7　田村柳壹論文（注5）、参照。氏は、慈円の筆名のうち「桑門時貞」「学生安成」「従五位下源朝臣信定」「神主康業」を挙げて、五位程度の卑位の実在人物の名を借りるが僧俗・官職などは任意に案出した借名であるとする。

8　有吉保『王朝の歌人8西行』（集英社・昭60）二〇四頁

9　当該贈答歌に関する主な先行研究を次に挙げる。

①有吉保「「新三井和歌集」の考察」（『和歌文学とその周辺』桜楓社・昭59）

②片山享『校本秋篠月清集とその研究』（笠間書院・昭51）六五八・六五九頁

③山本一『慈円の和歌と思想』（和泉書院・1999）一〇七～一〇九頁

④平田公平『日本の作家100人寂蓮』（勉誠出版・平15）五二～六二頁

⑤櫻田芳子「文治五年秋、良経・慈円・寂蓮の贈答歌について」（白百合女子大学言語・文学研究センター『言語・文学研究論集』4・2004三月）

10　①片山享著（注9②）研究篇V藤原良経詠歌年次考、②青木賢豪「藤原良経全歌集とその研究」（笠間書院・昭51）研究編、参照。

11　「さざ浪やしがのみやこはあれにしをむかしながらの山ざくらかな（千載集・春六六　忠盛）」がその端的な例で、良経もこの理解に基づいて、「のこりけるしがのみやこのひかりかなむかしかたりしはるのはなぞの（治承題百首・四一二）」「かはらずなしがのみやこのしかすがに

いまもむかしのはるのはなぞの（院句題五十首・九五五）」と詠んでいる。

12　四明の教法が天台宗の教学を指し、また天台教学の根本道場が天台山であることから、日本においては比叡山の別称とされた。

13　ちなみに、道家が息頼経の鎌倉下向に際して春日社に納めた願文には、「（前　略）人代のはしめ、大職冠（鎌足）、入鹿を誅して藤氏の大功として、天智天皇をたて奉りき、これすなハち武をもて君をたすくるなり、保元よりこのかた、一天下武士の手にいりて、武威にあらされハ世をおさむへからさるゆへに、藤門よりいて、将軍の仁にさたまるへしといひて、種々の道理をたてられき、（後　略）（『鎌倉遺文』六七二三号「九条道家願文」）」の如く、鎌足を藤原氏の祖として天智天皇との強い紐帯を意識した表現が見られ、九条家継嗣の持っていた歴史観の一端が知られる。

14　①片山享著（注9②）六六一頁、並びに②青木賢豪著（注10②）二四四頁

15　片山享「新風胎動―建久元年東大寺棟上行幸時の歌について―」（甲南女子大学「日本のことばと文芸」第一集・昭54十二月）

16　勧学講は建久五年八月十六日、兼実によって故皇嘉門院聖子御所が移築されて建立された大乗院において行われた。『玉葉』建久五年八月十六日条（大乗院供養）・同六年九月二十三日条（勧学講創設）、参照。①多賀宗隼『校本拾玉集』（吉川弘文館・昭46）七七九・七八〇頁、及び八三九頁
②石川一『慈円和歌論考』（笠間書院・平10）一三〇頁。氏は、勧学講を兼実の如法経供養（寿永元年九月～）・邸内九条堂仏事復興（文治三年二月十九日～）の延長線上にあって、「九条家による王法興隆」と位置づける。
③田中文英「慈円と勧学講」（大阪大学文学部日本史研究室編『古代中世の社会と国家』清文堂・平10）。氏は「天台勧学講縁起」・「天台勧学講起請七箇条」の検討を通して、「王法仏法相依の国家体制のもと」「学僧の全山的な養成機関であることを標榜して創設したもの」が勧学講であるとする。

17　片山享著（注9②）六七二頁

18　石川一「藤原良経の文事に関する考察―『南海漁夫北山樵客百番歌合』序・跋の検討」（アジア遊学別冊2・勉誠出版・平15十月）、参照。氏は、「南海漁夫」が『楚辞』「漁父辞」を、「北山樵客」が崔塗「樵者」をそれぞれ典拠とすることを指摘する。
　猶、山本一氏は、『南北百番歌合』は大乗院供養の記念として慈円によって発案された企画であるとする。（注9③）一五三～一五八頁

19　「平明閭巷掃花開、薄暮漁樵乗水入」（楽府詩集・九十巻「桃源行」王維）等、両者が対となる例は散見する。

20　『南北百番歌合』の数次に渡る成立過程を通して「南海漁父」は使用され、拾玉集第四帖四二六〇番歌以下の「献南海漁夫秋十首　北山樵客」にも同じ筆名が見出される。後者においても、拾玉集諸本ではすべて「漁夫」である。

21　「文殊の海に入りしには、娑伽羅王浪を息め、龍女が南へ行きしかば、無垢や世界にも月澄めり（梁塵秘抄・二・四句神歌・経歌一九三）

《新日本古典文学大系》」の如き歌話も世に行なわれていた。

22 先の竜女成仏と同様に、「淡路はあな尊、北には播磨の曹司を目守らへて、西には文殊師利、南は南海補陀落の山に対ひたり、東は難波の天王寺に舎利未だ坐します（梁塵秘抄・二一・四句神歌三一五）」の他、「うれしくも南の海の嶋がくれたづねてぞ見る北の藤なみ（拾玉集・春日百首「同居土」二九五八）」「霜をかぬ南のうみのはまびさしひさしくのこる秋のしらぎく（拾遺愚草・神祇部・（熊野）新宮「庭上冬菊」二九一〇《時雨亭叢書》）」等、良経周辺での受容も見出せる。

法楽百首として春日社奉納のために詠まれた慈円歌は、凡夫と聖人が同居する「凡聖同居土」を『袋草紙』所収歌を踏まえて詠む。熊野詣に従った際に詠まれた定家歌は、序詞的役割を果たす上句中に「南海」を詠み込む。

23 当該歌は、新古今集にも採られており（神祇・一八五四、第三句「だうたてて」）、そこでは「この歌は、興福寺の南円堂つくりはじめ侍りける時、かすがの榎のもとの明神よみたまへりけるとなむ」と左注する。興福寺南円堂は冬嗣の創設であることから、『建久御巡礼記』にも同様の藤原氏讃美の説話は載せられる。

24 南海漁父百首に関する主な先行研究を次に挙げる。

①久保田淳『新古今歌人の研究』（東京大学出版会・昭48）三篇第二章第三節、六　南北百番歌合と治承題百首

②寺田純子『古典和歌論集』（笠間書院・昭59）「建久末年の藤原良経——その述懐歌をめぐって」

③石川一著（注16②）Ⅱ第二章第五節『廿題百首』『北山樵客百首』——良経との交歓を軸として

④谷知子『中世和歌とその時代』（笠間書院・2004）第二章第一節「治承題百首」「南海漁父百首」の世界——『新古今集』巻頭歌の生成——↑「藤原良経の『治承題百首』『南海漁夫百首』について」（国語と国文学65の8・昭63八月）

⑤石川泰水「『南北百番歌合』成立過程考」（国語と国文学60の11・昭58十一月）

⑥片山享「建久期における藤原良経の述懐歌」（私学研修96・昭59）

⑦岡部寛子「建久末年における藤原良経『南海漁父百首』述懐歌について——『北山樵客百首』との比較における一考察」（富山商船高等専門学校研究集録27・平6七月）

⑧拙稿「『南海漁父百首』考——述懐性の分析を中心に——」（広島女子大国文15・平10九月）、参照。

25 西洞隠士百首に関する主な先行研究としては、久保田淳著（注24①）七三六～七三九頁、寺田純子著（注24②）、片山享論文（注24⑥）がある。そこに指摘される如く、作品の内部徴証や『後京極殿御自歌合』不撰入という状況などから、当該百首の成立時期は建久九年五月以降同年末までと、より限定される。

26 当該百首作品に吐露された不遇感については、拙稿「良経『治承題百首』『西洞隠士百首』考——九条家失脚を軸として——」（日本研究13・平11十月）、参照。

27 石川一著（注16②）Ⅱ第二章第六節『四季雑各廿首都合百首』―『源氏物語』・俊頼などの受容を中心に、四、参照。

28 谷知子「藤原良経の仏教と和歌」（国語と国文学66の9・平元九月）、参照。

29 ①谷知子「藤原良経の十如是の歌について」（解釈・平2十月）、②谷知子『中世和歌とその時代』（笠間書院・2004）一三五・一三六頁、参照。氏は①の中で、『法華経』方便品や『摩訶止観』に説明される「十如是」のうち「如是報」を詠んだ一六〇〇番歌について、現世の報いを後世に受けることを憂慮する寂蓮・定家の「如是報」詠と比較し、「良経は前世の罪によって今、この現世において悪報をうけているのだとして、現世を罪としてでなく、報いとして捉え、だからこれほど苦しくつらいのだと現実を厭っている点」に良経歌の特質を見ている。

30 「心の闇」は、「かきくらす心のやみに迷ひにき夢うつつとは世人さだめよ（古今集・恋六四六　業平、伊勢物語・六十九段）」の如く、恋によって分別をなくした様を言う場合もあるが、『法華経』授学無学人記品「世尊慧灯明、我聞授記音、心歓喜充満、如甘露見灌」に拠る歌であると詞書する「あきらけきのりのともし火なかりせばこころやみのいかではれまし（発心和歌集三三）」のように、法灯や（真如の）月と対され、迷妄の闇に迷う心という意味合いが主である。

31 「花間覓友鶯交語、洞裏移家鶴卜隣（和漢朗詠集・下「山家」五六〇紀長谷雄）」等がある。

32 石川一著（注16②）Ⅱ第二章第六節『四季雑各廿首都合百首』―『源氏物語』・俊頼などの受容を中心に、六、参照。

33 片桐洋一『古今和歌集以後』（笠間書院・2000）五〇四～五〇九頁、参照。氏は、『伊勢物語』同様、豊蔭と伊尹とのギャップによる面白味を狙った、物語的性格を指摘する。月清集にそこまでの性格は認められない。

（うちのしずか　台湾　中山医学大学　平成15年度修了）